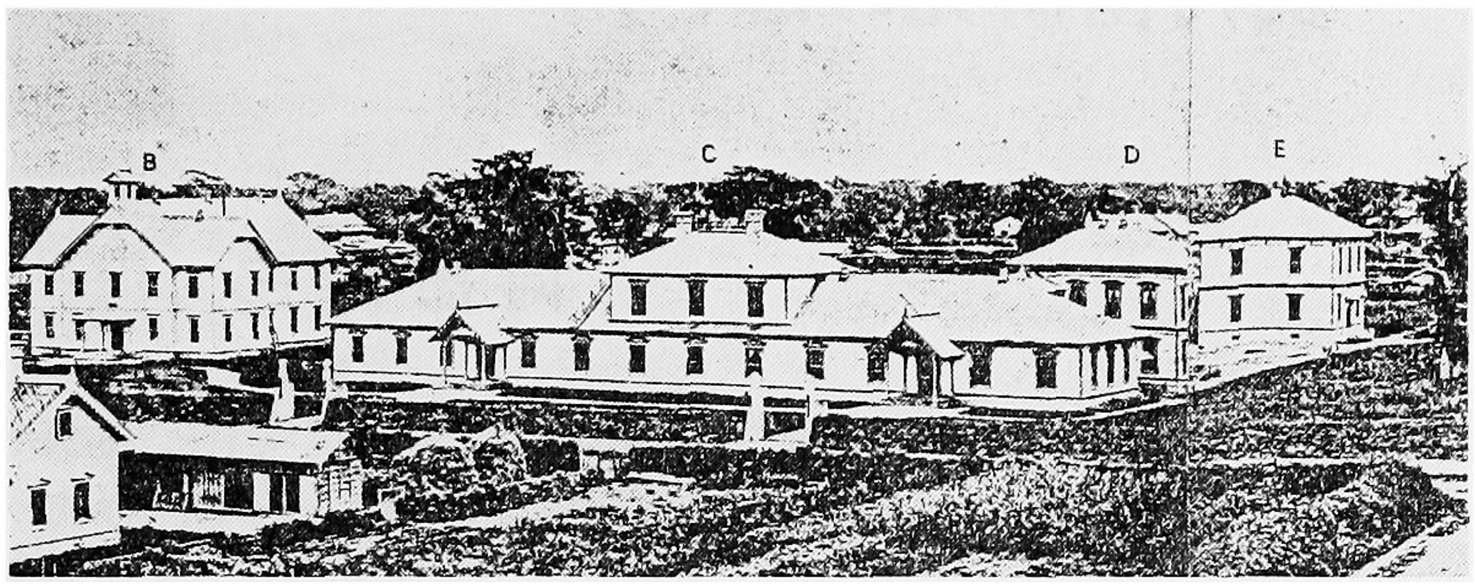
コラム ―――― その 1

札幌農学校の記録より



札幌農学校舎密講堂

北大農学部の前身である札幌農学校は，明治9年(1876)，米国マサチューセッツ農科大学長，W.S. クラーク博士を教頭に迎えて開校した．その当初から，無機・有機化学，物理化学，分析化学，そのほか農芸化学関連の授業と実験が非常に多く，週30時間のうち，6～8時間がこれに当てられていた．

クラークは，ドイツのゲッチンゲン大学において，「隕石の化学的成分」で学位をとった化学者であり，さらに植物生理学者でもあったが，化学の授業は，彼に同行したペンハロー氏によってもっぱら行われていた．

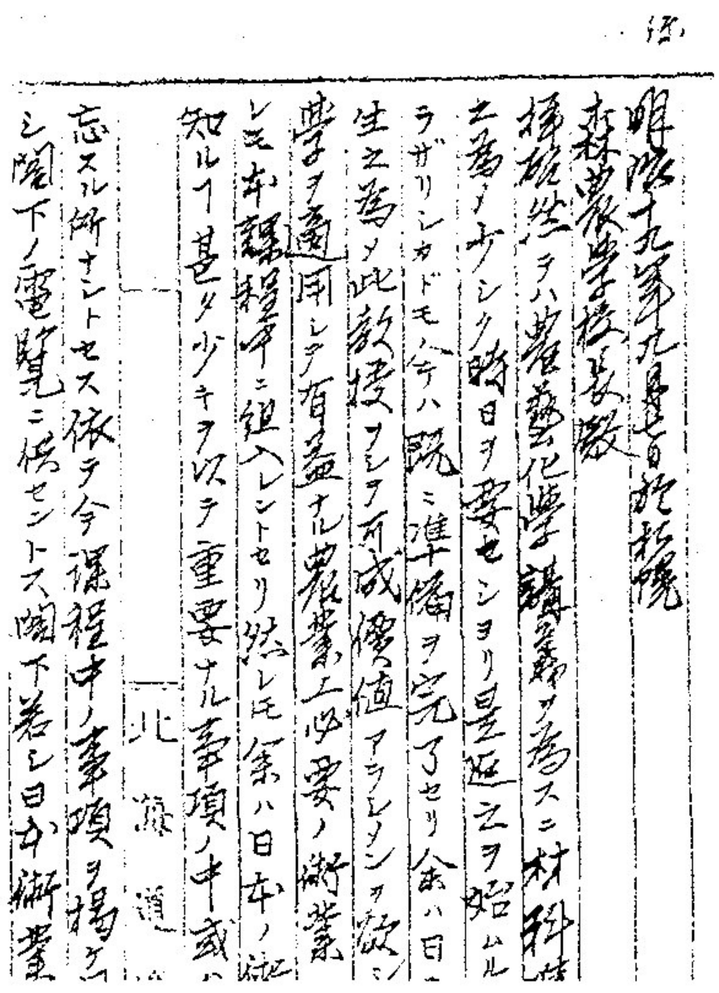
開校の翌年，このペンハロー先生の設計になる化学実験用の講堂が竣工し，化学教育はますます充実することになった．ここに掲げた写真は，当時のキャンパスの一部であるが，演武場（B，現在の時計台），寄宿舎（C），復習講堂（D）の右端に化学講堂（E）が見られる．

この建物は，明治36年，キャンパスが北大の現在地に移転するまで舎密講堂と呼ばれ，札幌農学校における農芸化学教育の拠点になった．

舎密とは化学の意，宇田川榕菴（1798～1846）の著したわが国最初の化学書，「舎密開宗」に由来するといわれている．

100年前の農芸化学講義

明治9年，札幌農学校開校当時，クラーク博士に同行した化学者ペンハローは，明治13年帰国し，その後しばらくは日本人教師が化学の授業を受けついでいた．しかし，明治18年，再び米人ストックブリッジがマサチューセッツから来学した．



翌明治19年(1886)，彼は着任以来担当していた農芸化学の講義について，森・農学校長に意見をしたためた．彼の書簡は，そのときの和訳文とともに，いまも北大図書館の北方資料室に保存されている．

ここに，その和訳の一部をのせた．明治19年9月7日づけ文面の最初の行に，「農芸化学講義」の文言が見られる．

ストックブリッジ先生自筆の原文は和罫紙に書かれており，インクがにじんでいるため示すのをさし控えたが，農芸化学講義に相当する部分は，「Lectures on Agr. Technical Chemistry」と記されている．

いまから100年前に書かれたこの和英対訳は，「農芸化学の100年」誌にふさわしい書簡と思われる．

（高尾彰一）